

Japanese Graded Readers

レベル別 日本語多読 ライブラリー



にほんごよむよむ文庫

レベル **3** vol.2 **10**

落語^{らくご}



再話 = 栗野 真

挿絵 = はやし

監修 = 三笑亭

NPO法人日本語多読研究会

にほんご よむよむ文庫 レベル 3

らくご 落語

再話（さいわ）：栗野 真紀子（あわの まきこ）

挿絵（さしえ）：はやし・ひろ

監修（かんしゅう）：三笑亭 笑三（さんしょうてい しょうざ）

NPO 法人 日本語多読研究会（にほんご たどく けんきゅうかい）

<監修者紹介>

NPO 法人 日本語多読研究会 (にほんご たどく けんきゅうかい)

とうけんきゅうかい がくしゅうしゃ のための「よ 読みもの」をつくることをもくてき に、ほんごきょうし 日本語教師が
あつ ねん がつ ほっすく ねん がつ ほうじん 集まって、2002 年 1 月に発足しました。2006 年 9 月に NPO 法人になりました。
べつ よ かいほう たどく じゅぎょう じっせん けん
「レベル別読みもの」を開発したり、それらを使った「多読」の授業の実践・研
きゅう 究をしたりしています。http://www.nihongo-yomu.jp

レベル別日本語多読ライブラリー (にほんご よむよむ文庫)

[レベル 3] vol.2

落語

2007 年 7 月 12 日 初版発行

再話：栗野 真紀子 (日本語多読研究会会員・日本語教師)

作画：はやし・ひろ

監修：三笑亭 笑三 (噺家・社団法人落語芸術協会理事)

NPO 法人 日本語多読研究会

ナレーション：三笑亭 笑三

録音・編集：スタジオ グラッド

デザイン・DTP：浅妻 健司

発行人：天谷 修平

発 行：株式会社アスク 出版事業部

〒162-8558 東京都新宿区下宮比町 2-6

TEL.03-3267-6866 http://www.ask-digital.co.jp

印刷・製本：株式会社光邦

許可なしに転載・複製することを禁じます。

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

©NPO法人日本語多読研究会 2007

Printed in Japan ISBN978-4-87217-643-8

にほんご よむよむ文庫 レベル 3

らくご 落語

再話（さいわ）：栗野 真紀子（あわの まきこ）

挿絵（さしえ）：はやし・ひろ

監修（かんしゅう）：三笑亭 笑三（さんしょうてい しょうざ）

NPO 法人 日本語多読研究会（にほんご たどく けんきゅうかい）

落語^{らくご}について

この人は「落語家^{らくごか}」です。「噺家^{はなしか}」とも言います。
「落語^{らくご}」という面白い話^{おもしろ}をします。



はなしか さんしょうてい しょうざ
噺家・三笑亭 笑三さん <撮影>黒部 侑



こうざ あ はなし さんしょうてい しょうざ
高座に上がって話をする三笑亭 笑三さん

落語は、一五〇〇〜一六〇〇年頃に、お坊さんや学者などが、織田信長や豊臣秀吉などの戦国大名に面白い話をしたのが始まりと言われています。

江戸時代（一六〇三〜一八六八年）になると、京都、江戸（今の東京）、大阪で、道に立って人々に話をする「噺家」が出てきました。江戸時代の終わり頃、落語を聞くことができる場所「寄席」ができて、たくさんの方が落語を聞きに来るようになりました。今も、大阪と東京に寄席があります。

落語家は着物を着て、扇子と手ぬぐいを持って「高座（舞台）」に上がります。扇子は、箸や刀や筆になります。手ぬぐいは、本や手紙になります。

落語には、男や女、おじいさん、おばあさんなどいろいろな人が出てきます。落語家は、その人たちの言葉を全部一人で言います。話がとても面白いので、客は大笑いします。



扇子と手ぬぐい

まんじゅう怖い

みなさんは、怖いものがありますか？ だれでも怖いものがあると思います。

五人の若い男たちが、お酒を飲みながら話しています。

八郎、角次、熊吉、源太、善助、いつもの五人で、何が怖いか話しています。

八郎「みんなは何が怖い？」

おれは長くて細いものが怖いな。

蛇とか、ウナギとか……」

角次「おれは蛙が怖い」

熊吉「え？ 蛙が怖い？ どうして？」



角次「蛙は口が大きくて、

それが急に開くから怖いんだ」

八郎「熊吉は何が怖い？」

熊吉「象が怖いな」

八郎「象か……。大きいからなあ。

でも象の目はやさしいよ。

源太、源太は何が怖いんだ？」

源太「蟻」

八郎「へえー、

あんなに小さいものが怖いのか。

善助は？」



善助「えーと……」

八郎「教えろよ。ほら、早く、善助」

善助「笑わないか？」

八郎「え？」

善助「言っても笑わないか？」

八郎「笑わないよ。だから早く言えよ」

善助「本当か？ 本当に笑うなよ。」

おれは……、おれは、まんじゅうが怖いんだ」

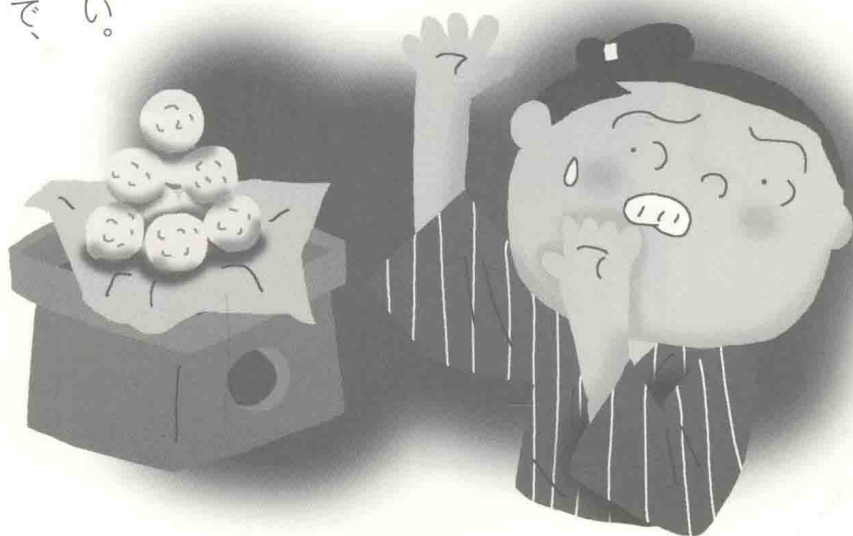
角次「まんじゅうって、あんこが入っていて甘くて、

おいしいお菓子のまんじゅうかい？」

善助「そう、お菓子のまんじゅうだ。ああ、怖い、怖い。」

それに、おれは『まんじゅう』って言っただけで、

気分が悪くなるんだ。ううううう……」



そう言^いうと、善助^{ぜんすけ}は隣^{となり}の部屋^{へや}に行^いって寝^ねてしまいました。

八郎^{はちろう}「聞^きいたか？」

善助^{ぜんすけ}はまんじゅうが恐^{こわ}いんだ」

熊吉^{くまきち}「聞^きいた、聞^きいた。」

いやあ、知ら^しなかったなあ」

源太^{げんた}「おれも知ら^しなかった。」

あんなおい^{こわ}しいものが恐^{こわ}いのか……」

八郎^{はちろう}「いい考^{かん}えがあるぞ！」

角次^{かくじ}「何^{なん}だ？」

八郎^{はちろう}「まんじゅうをたくさん買^かってきて、

善助^{ぜんすけ}のそばに置^おこう」

角次^{かくじ}「ははは……。それは面^{おも}白^{しろ}い」



善助は、みんなにときどき嘘を言います。だから、みんなは、今日は善助が困ることをしようと思いました。善助の嫌いなまんじゅうをそばに置いたら、善助はどうするでしょう。泣くかもしれません。面白いです。

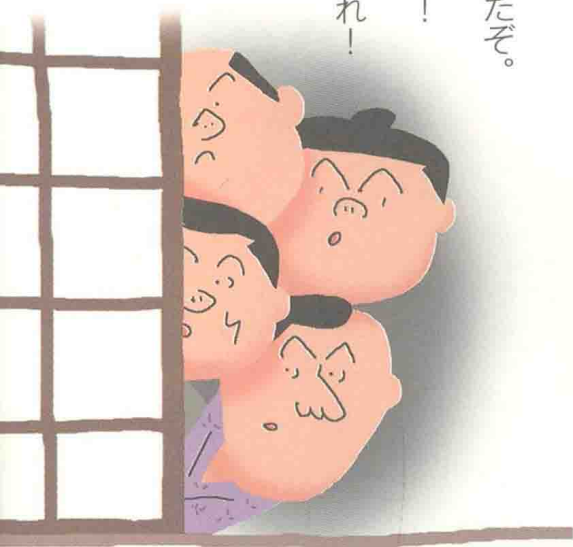
みんなは、まんじゅうをたくさん買ってきました。そして、善助が寝ている布団のそばに、買ってきたまんじゅうを置きました。それから、部屋の外で善助が起きるのを待ちました。

善助「あーあ、よく寝たー。気分がよくなったぞ。

あれ？ こんなところにまんじゅうが！

あつ、恐い、恐い。おーい、助けてくれ！

だれか、早くー」



部屋の外でみんなは笑いました。

みんな「ははははははは……」

みんなは戸を少し開けて、部屋の中にいる善助を見ました。すると、善助は「助けてー」と言いながら、まんじゅうを食べています。一つ、二つ、三つ、四つ……。どんどん食べて、とうとう全部食べてしまいました。みんなはびっくりしました。



八郎「善助がまんじゅうを食^たべた！」

角次「十個も食^たべた！」

善助「あーあ、おいしかった」

源太「おいおい。」

善助「まんじゅうを全^{ぜん}部^ぶ食^たべたな。」

なんだ、まんじゅうが恐^こいというの^わは

嘘^{うそ}だったのか？」

八郎「善助、本^{ほん}当^{とう}に恐^こいもの^わは何^{なん}だ？」

善助「『熱^{あつ}いお茶^{ちや}』が恐^こい！」



時そば ときそば

ある冬の夜のことです。男が
ある ふゆ よる おとこ
暗い道を歩いています。
くら みち ある

男 おとこ 「おなかがすいたなあ。

そばでも食べようか」
た

そのころ、道に簡単な店を出し
みち かんたん みせ
て、そばを売る人がいました。屋
う ひと や
台のそば屋です。
たい

そばは一杯、十六文でした。
いっぱい じゅうろくもん

「文」は、そのころのお金です。
もん かね



男 おとこ 「おい。そば屋！」

そば屋 そばや 「いらっしやいませ！ 寒いですねえ」

男 おとこ 「そば、一杯！」

そば屋 そばや 「はい」

男 おとこ 「寒いから早くしてくれ」

そば屋 そばや 「お待たせしました」

男 おとこ 「これは早い！ 寒いときに熱いそば！

うれしいなあ。いただきます」

(ずるずるずる……)

男 おとこ 「うまい！

こんなにおいしいそばは食べたことがない」

(ずるずるずる……)



男 おとこ 「おい、そば屋、本当においしかった。

また明日来るよ。えーと、いくらだい？」

そば屋 「十六文です」

男 おとこ 「小銭しかないんだ。

間違えるといけないから、手を出してくれ」

男 おとこ は、そば屋の手の上に一文ずつ置きます。

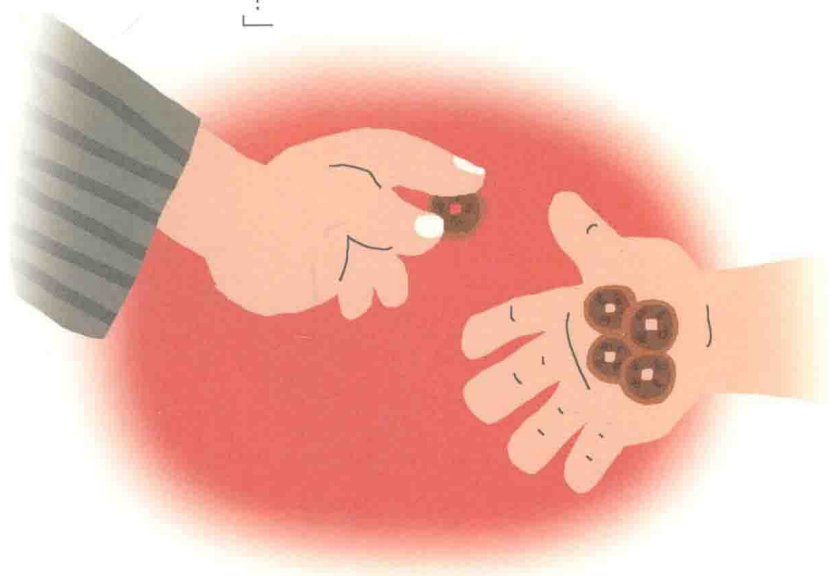
男 おとこ 「一、二、三、四、五、六、七、八……今何時だ？」

そば屋 「九時です」

男 おとこ 「十、十一、十二、十三、十四、十五、十六。

はい、十六文。じゃあ、またな！」

そば屋 「ありがとうございました」



男はどこかへ行ってしまいました。それを与太郎が見ていました。

与太郎

「なんだ、あの男は？」

『いくらだい？』なんて聞いて。

十六文にきまつてるじゃないか。

それに、子どもじゃないんだから、

十六文を間違えるはずないじゃないか。

『一、二、三、四、五、六、七、八

……今、何時だ？』って、

変なところで時間を聞いたな。

それから、『九時です』

『十、十一、十二、十三、十四、十五、十六』

あれ？ ちょっと変だぞ。『一、二、三、四、五、六、七、八……今、何時だ？

